

■第1小委員会議事録

委員名：橋本秀晴委員、山本博一委員、藤村由美子委員、八木澤龍之介委員、西田由記子委員

【基本目標1】相談支援の充実 評価結果：B

◆施策の方向性1 分野横断的な包括的支援体制の整備 評価結果：B

◆施策の方向性2 多機関との協働・連携 評価結果：B

◆施策の方向性3 相談支援体制の充実 評価結果：B

◆施策の方向性4 情報提供の充実 評価結果：B

◆施策の方向性5 権利擁護活動の推進 評価結果：B

(意見)

委員：7. 子育て相談センター運営事業の事業内容について、サロンの相談件数が増えることはよいことであるので、その他にも、複雑な問題や育児不安の方に対してどのように対応したか、どのような成果があったがわかるとよい。

委員：すべて事業で成果指標を何にするのかは難しい。例えば、「相談が終結した件数がどれくらいあるか」が考えられるが、把握が難しいと思われる。市子育て相談課では、年度ごとにサロンの人数だけでなく、相談内容ごとの件数や虐待件数などは公表している。相談体制が充実していることは確かであり、最近では母子保健が統一されたことは連携して動きやすい体制になったと思う。

委員：以前あった地域の母子保健推進員がなくなり、行政で行うことになったと聞いた。

委員：母子保健推進員の訪問は、生後2～3か月の母子家庭が対象で、子育て相談というよりは身体的な健康の相談が多く、母子保健推進委員では答えられない内容もあった。健康相談以外の相談窓口は必要であり、今はそれをサロンが担っていると思う。

委員：最近お子さんからの相談が増えている。サロンの情報が分からないことが多いので、サロンにつながりまでの支援の拡充や、ネットワークが広がるとよいと思う。相談内容としては、ひきこもりなどが増えており、活動の場所の提供はしているが、その先の支援につながっていない。

委員：子どもの頃は、隣近所のお母さんに話したり怒られたりしてきた。今は地域の関係性が希薄になってしまって相談窓口で支援を受けるようになっている。できるだけ多くの、広い世代の方が何かしらの形で関わられるような仕組みがあるとよい。

委員：抱えている課題を発信しづらい状況になっており、アウトリーチが必要になっている。地域のつながりは大切である。

【基本目標2】社会参加の促進 評価結果：B

◆施策の方向性1 制度の狭間にある人への社会参加支援 評価結果：B

◆施策の方向性2 孤独な人・孤立している人への社会参加支援 評価結果：B

◆施策の方向性3 日常生活で支援を必要とする人への社会参加支援 評価結果：B

(意見)

委員：社会参加は必要なことで、行政だけではなく、地域住民と一緒に進めていく必要がある。

委員：意識が高く参加できている方がいる一方で、参加できない方をどのようにしたら引き付けられるか考えている。楽しさを見せて興味を持ってもらい、日常の中にある市民活動が伝わればよいと思う。例えば、自分の子どもの迎えと一緒に他の子ども見守ることや、犬の散歩のついでにゴミ拾いなどの活動など、ちょっとした活動が市民活動になると思っている。

委員：ひきこもりの人は長く社会に関わっていないため、解決が困難になってしまう。本人は支援を望んでいない場合は、情報をあってもその方にたどり着くことが難しい。ひきこもりの人はどのくらいいるのか。

事務局：件数はわからない。本人にはたどり着けないことがあるので、回りで困っている家族の支援を行っている。そこから解決策につなげている。

委員：居場所としては、好きなものを通して、最初は1対1の少人数で関わり、徐々に広がっていく仕組みができるとよい。制度の狭間の人、福祉サービスの利用ができない人、制度の対象にならない人の体験、支援ができるような仕組みがあるとよい。

委員：目的がなくてもいられる居場所、例えば市のクーリングシェルターのような場所が必要でないか。

【基本目標3】地域づくり（地域力の強化） 評価結果：B

◆施策の方向性1 地域で支え合う仕組みづくり 評価結果：B

◆施策の方向性2 安全・安心なまちづくりの推進 評価結果：B

◆施策の方向性3 交流の場・活躍の場づくりとボランティア・市民活動の推進 評価結果：B

(意見)

委員：子育て中のお母さんは支援される側のイメージがあるが、小さなことでも人の役に立ちたいを思っている人はいる。「これならできる」といった小さな活動が具体的にあるとよい。地域の中で小さな活動、例えば、「子どもが通る時間にゴミ捨てしませんか、犬の散歩を試みませんか」など。「一緒に歩いてください、どこかに立ってください」はハードルが高くなる。

委員：以前、子供を守るまち那須塩原の宣言があり、本質は「ながら見守り」だったが、その後、てこ入れがなかった。

委員：病気や障害をお持ちの方を中心に開催するイベントを通して、意識啓発ができればよい。

委員：地域のつながりが希薄になっていることはやはり感じる。地域にいても近所の方との接点がない。自宅と会社の往復だけで、地域で何か一緒にやることがない。回覧板を回すにしても留守の家のポストに入れてくるだけ。こういう地域性の中で、どうやって地域のつながりを作っていくといいか。

委員：昔は社会が「向こう三軒両隣」を要求していた。今は、隣の人に頼らなくてもよくなり、必要がなくなった。地震のときなど、住民が人と人とのつながりが大切と思うことが必要

と感じている。

委員：何かきっかけが必要で、最初は挨拶だけかもしれない。その繰り返しの中で気付きが生まれると思う。話さなければと始まらない。

委員：子育てサロンでは、参加するお母さんがスタッフと関係ができてくると、他のお母さんと話すようになる。知り合うことによって、卒業して来ないこともある。